

実践研究事業

特色あるプログラムの開発・拡充と
施設の教育力向上に関わる調査研究

ー各年代におけるモデル的实践ー



海之道 若狭湾

～ つながろう そこにあるのは海と山 ～

令和5年3月



独立行政法人国立青少年教育振興機構
国立若狭湾青少年自然の家

Ⅰ. はじめに

1. 国立若狭湾青少年自然の家の周辺環境と伝統文化

若狭湾青少年自然の家は、若狭湾国定公園のほぼ中央に突き出た黒崎半島の一角に位置している。施設の前面にはリアス海岸特有の美しく雄大な若狭湾が広がり、古くは東アジアから世界へつながる歴史と文化の玄関口となっていた。山にはクロマツやコナラ、ヤマザクラ、ヤブツバなどが群生しており、眼下に広がる海には手つかずの自然の沢を通して栄養を蓄えた水が流れ込み、ホンダワラ科の海藻の群落や海中林が多く見られ、それらを住処にする生物も多く生息しており、まさしく「自然の家」にふさわしい、大自然が施設の目前に広がっている。この好条件を生かし、当施設では、カッターやシーカヤック、スノーケリング、ハイキングやオリエンテーリングなどの海や山の自然体験を提供している。

2. 研究の背景

国立青少年教育振興機構は、第3期教育振興基本計画（平成30年6月15日閣議決定）や「人口減少時代の新しい地域づくりに向けた社会教育の振興方策について（答申）」（平成30年12月21日）等の国の青少年教育行政に関する基本方針を踏まえ、ナショナルセンターとして、次代を担う青少年の自立に向けた健全育成を総合的に推進していくことが求められている。その際、青少年が社会の担い手となることを支援する拠点としての役割や、「社会に開かれた教育課程」の実現に向けた学校との連携強化を図る観点も重要であると考えられる。また、今後の地域における社会教育が目指す役割として、人づくり・つながりづくり・地域づくりの側面が示されており、学びと活動の循環が重要とされている。これらを踏まえた上で、国土強靱化基本計画によるリダンダンシー（広域防災補完拠点）としての防災・減災教育等の推進や子どもの貧困対策等の国の政策実現に向けた取り組みの推進や、利用団体への教育的支援の充実、家庭・地域の教育力の向上や体験活動の普及、地域との連携・協働の推進による地域貢献を重点事項と捉え、教育事業や研修支援等において体験活動をより一層推進することを目指している。

独立行政法人国立青少年教育振興機構第4期中期目標・計画（令和3年3月30日文部科学省認可）令和7年目標・計画終了時に、全地方施設が研修支援において全国ナンバーワンと言える研修プログラムを提供でき

るよう、施設の個性化、高度化、拠点化を目指した特色あるプログラムや国の政策実現に向けたプログラムの開発及び拡充が求められている。施設主催の教育事業で行った内容を活動プログラムに落とし込むなど、利用団体に提供できるように工夫する必要がある。

特色あるプログラムは、各施設の設定した教育テーマに基づき、教育事業と研修支援を連動させながら、地域から理解・認知され、活用されるプログラムの開発・拡充を行っていくことが求められている。

3. 本研究の教育テーマと仮説

若狭湾では、**教育テーマを「豊かな海を守るため、身近な私たちの生活の中から改善していく方法を一緒に考えるプログラムを開発する。」**とし、若狭湾を取り巻く自然や文化、歴史、産業に着目し、持続可能な地域づくりに寄与した自立（自律）した青少年を育成することを目的とした。**研究の仮説を「特色あるプログラム開発・拡充を進めることで、自立した子ども達が育成されると同時に、自然の家の教育力が向上するだろう。」**とし、各年代において、学習指導要領で育成を目指す資質・能力の三つの柱

- ① 学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性」の涵養
- ② 生きて働く「知識・技能」の習得
- ③ 未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力の育成

を念頭に置き、「探求的な興味関心の日常化」「自己実現力・自己成長力の涵養」「課題に向き合う力の育成」を目指し、教育事業を展開し、特色あるプログラムの開発・拡充を進めた。

4. 仮説に迫る手立て

海の特色化に関わる研究事業として、①幼児期、②小学校低学年、③小学校高学年～中学生期、④高校生期の4段階に分類しそれぞれに対応する教育事業を以下①～④のように計画した。

- ①しぜんはともだち（海編）
- ②僕らは勇者だ！わかさわんキッズ冒険隊
- ③若狭湾海冒険
- ④高校生顕彰制度地域探究プログラムオリエンテーション合宿 in 若狭

各事業の主担当者は企画指導専門職が担当し、過去の事業担当実績を鑑み、本研究の理解と高度化が進むように配慮した。さらに、企画指導専門職会議を設け所内全員で事業に取り組む意識をもち、互いに進捗状況を確認すると共に、研究の方向性を確認した。事業主担当者がファシリテーション能力を発揮し、事業の見える化、他事業との連携、他機関との連携を明確に示し、余裕をもって事業計画準備等に取り組めるようにした。また、企画指導専門職の他、事業推進係、総務・管理係が積極的に事業に関わることで施設の教育力の向上を目指した。

今年度は、SDGs ワーキンググループを4つの部会に分け（インクルーシブ教育推進部会、環境教育部会、働き方改革部会、ユニバーサルデザイン部会）、負担が偏らないように互いが注視し、適切な業務分担を目指した。職員がSDGsの視点を持ち、それぞれの部会で取り組むことにより、施設職員のやりがい、働きがいの醸成を目指した。

また、昨年度からの課題であった、自然の家の教育力向上の評価については、事業評価シート、施設評価シートを一新し、職員にアンケートを実施することで、具体的な効果測定になるよう工夫した。

以上のように、「特色あるプログラムの開発・拡充を進めることで、自立した子ども達が育成されると同時に、当施設の教育力が向上するであろう。」という仮説の元、本研究に所員一丸となって取り組んだ。

5. 効果測定の方法

ア 事業参加者の数値的評価（IKR アンケート）

| |
|--------------------------|
| 探究的興味関心の日常化（学びに向かう力・人間性） |
| 自己実現・自己成長（知識・技能） |
| 課題に向き合う力（思考力・判断力・表現力） |

を育成したい資質・能力とし4事業共通の評価項目を立て、参加者アンケートを作成し、事前事後での調査・分析を行うことにした。

「探究的興味関心の日常化(学びに向かう力・人間性)」では主に「どのように社会、世界と関わり、より良い人生を送るか」を、「自己実現・自己成長（知識・技能）」では、子ども達が、「何を理解しているか、何ができるか」を、「課題に向き合う力(思考力・判断力・表現力)」では、「理解していること、できることをどう使うか」を各年代別にアンケート内容を準備して調査をした。ア

ンケートは IKR アンケートを使用し、各項目を育成したい資質・能力にあてはめ、事前事後の平均の差を見ることで評価とした。

イ 事業参加者評価（記述式アンケート）

事業最終日に参加者に、事業で学んだことについてのアンケートを実施した。

ウ 職員の教育力向上の評価

施設職員へは、事業終了後に、事業反省会と共に、事業評価シートを記入することで施設の教育力の向上に関する調査を行った。それらを1年間の事業を通して継続的に評価した。

エ 施設の教育力の把握

10月に施設評価アンケートを全職員に実施した。

① しぜんはともだち（海編）

Ⅱ-① 材料と方法

1. 研究のテーマと仮説

幼児期のテーマを「豊かな感受性」の育成とし、「特色あるプログラム開発・拡充を進めることで、園児に豊かな感受性が育まれると同時に自然の家の教育力が向上するであろう」という仮説のもと、研究を進めた。各年代において、幼稚園教育要領で示された育みたい資質・能力の三つの柱

- ① 心情、意欲、態度が育つ中で、よりよい生活を営もうとする「学びに向かう力、人間性等」
- ② 豊かな体験を通じて、感じたり、気付いたり、分ったり、できるようになったりする「知識及び技能の基礎」
- ③ 気付いたことやできるようになったことなどを使い、考えたり、試したり、工夫したり、表現したりする「思考力、判断力、表現力等の基礎」

を念頭に置き、「探求的な興味関心の日常化」「自己実現力・自己成長力の涵養」「課題に向き合う力の育成」を目指し、教育事業を展開し、特色あるプログラムの開発・拡充を進めた。

幼児期対象の本事業では、

- ア 海遊びをする中でより海を身近に感じ、自然と触れ合う楽しさや面白さを知る（探求的な興味関心の日常化）
- イ 海遊びをする中で、新しい発見をしたり、分ったり、できるようになったりする（自己実現・自己成長）
- ウ 海遊びをする中で、試行錯誤しながら工夫して活動する姿が見られる（課題に向き合う力）

をテーマに研究を進めた。

また、所内全員で取り組む意識を持ち、職員、ボランティア、施設の教育力向上を目指した。

2. 職員の教育力向上に向けた取組み

本事業を実施するにあたり、目的や目標、プログラムのイメージ、園児への関わり方等を共有するために事業前に、職員やボランティアと打ち合わせを行った。

職員の研鑽の場として、近隣市町の連絡協議会に出向いて情報交換や相談会を行い、園の方針に添った関わり

や、個に応じた支援について学ぶ場を設定した。

担当者それぞれに役割を分担することで、責任感が生まれ、プログラム進行を任せることで、達成感や充実感を得られるよう計画した。

事業当日は、海象状況やプログラムの進捗状況、園児の様子などについて、無線で共有しながら運営できるよう進めた。

3. 迫る手立て（プログラムデザイン）

海の活動として、水泳エリアでの自由な遊び、タイドプールでの生き物探しを行う中で自然と触れ合う楽しさや面白さを感じ、「探求的な興味関心」をもてる場を設定した。また、日常生活とは異なる自然の中で、感じたり、気付いたり、分かったり、できるようになったりすることで「自己実現・自己成長」を促せるようにした。さらに身に付いた「知識及び技能の基礎」をもとに、諸感覚を通して考えたり、試したり、工夫したりする中で「思考力・判断力・表現力等の基礎」の醸成の場とした。

活動時には「活動場所」や「活動時間」について、「いつ」「何を」するのか幼児自らが選択できるよう幼児の様子に寄り添いながら柔軟に対応し、子どもの自主性を生かした活動とした。

また、園児の心理や行動を予測した安全管理ができるよう、園の先生と事前の打ち合わせや役割分担をする等連携を図った。

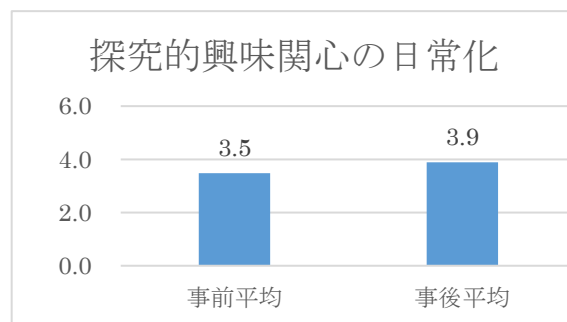
Ⅲ-① 結果と考察

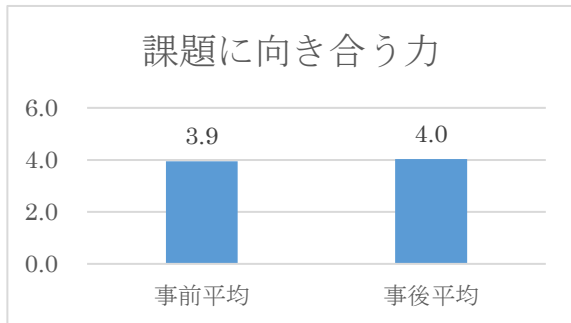
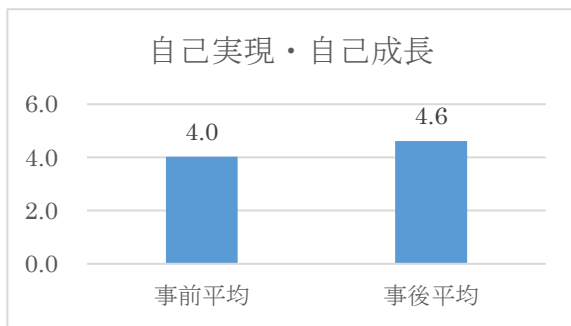
1. 結果

ア 参加者アンケート（IKR アンケート）

（敦賀市 14 園、小浜市 9 園、若狭町 9 園、おおい町 3 園）

事業の事前事後で、各園の先生 35 名に以下の各項目の調査を実施した。「探求的な興味関心の日常化」「自己実現・自己成長」「課題に向き合う力」の変化を見てみると、どの項目も事前と比較して事後が高い数値となった。





イ 参加者アンケート（記述式）

探究的興味関心の日常化

- ・休憩をはさんで再び海へ向かう場面では、最初に海へ向かうときとは別格に表情の違いがあった。
- ・「早く行こう」とキラキラして表情で海に自ら関わろうとしていた。
- ・たこを見つけた驚きの余韻をいつまでも感じていた。また波打ち際ではたこがユラユラと手を広げていたのか、逃げるときにまっすぐになっていた様子を体でも「こんなんやったなあ」と表現していた。
- ・事前にタライに捕獲してあったウミウシを触らせてもらい、「うわっ、ぐにゅぐにゅする！」と感触を楽しんだり「水から出したらかわいそうやで」など生き物に優しくしたりしようとする姿も見られた。
- ・帰園後や後日に図鑑を見て、「この魚おった！」「キュウセンって言うんやで！」と保育士や他クラスの友達に伝えていた。

自己実現・自己成長

- ・磯遊びは、初めての経験という子も多く、岩場の滑る感覚や海水のしょっぱさなどに遊びながら気が付いていた。初めは、岩場で滑ることに対して、歩き辛さや恐怖心を感じていた子も、遊んでいるうちに岩場の歩き方にも慣れ、体験を通して、どうすればよいのかを自然と考えていた。
- ・家庭では「2回も飛び込むことができたんだよ」

と自慢げに伝えたようで、その後も家族で海に行ったり、海での思い出を友達と楽しそうに話したりする姿が見られ、自信につながったように感じた。

課題に向き合う力

- ・飛び込んだ時に、鼻に海水が入った様子。もうしないのかな…？と試みていると、鼻をつまんで飛びこんでいた。友だちにも、「こうやってしたら、水入ってこないよ！」と自分の経験から得た知識を友だちにも伝えていた。
- ・魚は逃げてしまうから、気づかれないように、そっと近づくんだよ！となかなか捕まえることが出来なかったが、その中でも、どうやったら捕まえられるのかを子どもたちなりに考えている様子だった。
- ・「手をこうやってすると進むよ」「らっこってこうやって浮いて泳ぐんやで」などと、海の中でも友達と教え合ったり声を掛け合ったりする姿が見られた。



ウ 職員の教育力向上に向けた取り組みの評価

この事業はこれまでの蓄積を活かし、プログラムが確立しており、協議を通して新たにプログラムをデザインするという場面は少なかったが、全10回の日帰り事業であったため、全職員で毎回成果と課題については協議を実施し、園児の自主性を大切にする関わりや、配慮を要する子どもへの対応の仕方などについて考える機会をもてた。

アンケートでは「毎年、期待感をもって参加されており、継続して事業をすることの大切さや意義を学びました。」「参加者が安心してのびのびと過ごすための、安全管理の方法と、情報の共有の仕方が参

考になりました。」などの意見があり、このことから、**2. 職員の教育力向上に向けた取り組み**で挙げたことを意識して取り組んだ結果、職員の教育力向上やそのきっかけにつながったと考える。

2. 考察

【成果】

探究的興味関心の日常化

数値としては0.4ポイント上昇した。事業の中で生き物を身近に感じて興味関心をもち、事後の生活の中で、図鑑などで調べる習慣が身に付いたり、田んぼ沿いの川で捕まえて育てたり、色々な体験教室に興味を持ち始めたり、家族と海にでかけたりするなど、探究的な興味関心の日常化としてのきっかけづくりができたと考えられる。

自己実現・自己成長

0.6ポイント上昇した。海や生き物に対して、恐怖を感じていた子どもも徐々に慣れ、できなかったことができるようになる姿が多く見られた。飛び込み台から飛び込みにチャレンジしたり、タライの中の生き物を触ったりしながら成長していた。「できるようになりたい」思いが何度も繰り返しチャレンジすることにつながり、できた時の達成感につながっていたと考える。

課題に向き合う力

0.1ポイント上昇した。泳ぎ方を自分なりに工夫して泳げるようになったり、海や生き物のことで気づいたこと、感じた事を伝え合ったり、生き物の探し方を相談したりするなど、友だちと試行錯誤しながら工夫して活動している姿が見られた。

【課題】

探究的興味関心のきっかけづくりはできていたと考えるが、日常化を図るための手立てが必要である。事業の成果や効果について、広く園や保護者、関係部局に普及・啓発し、事前や事後の発展した取り組みにつなげていかなければならない。

個に応じた課題に対応し、園児の自主性を大事にした関わりができるよう、発達段階における園児の特性や運動技能などの理解を深めるための研修会・講習会への参加を含め、今後さらに職員のスキルアップを図る場を提案していかなければならない。

運営体制について、遊びを発展させたり、変化させたりするための場や機会、発問の工夫について事前に十分

に検討し、共通理解をもって支援して行かなければならない。また、園児が自ら関わりたくなるような魅力ある活動の展開や、楽しさや満足を得ながら集中力を養い、じっくりと取り組める時間を確保できるよう、プログラムをデザインする必要がある。

3. 今後の展望

本研究は、幼稚園教育要領で示された育みたい資質・能力の三つの柱を読み替え、

ア 海遊びをする中でより海を身近に感じ、自然と触れ合う楽しさや面白さを知る

イ 海遊びをする中で、新しい発見をしたり、分ったり、できるようになったりする

ウ 海遊びをする中で、試行錯誤しながら工夫して活動する姿が見られる

をテーマに進めた。考察でも述べたが、参加者の様子や事後アンケート、IKR 調査項目数値から向上から見られたことから、一定の成果が得られたことが伺える。よって実践研究事業としては今年度で一旦の区切りとする。

今後、日常化を図るための手立てや、遊びを発展させたり進化させたりする仕掛け、園児の発達段階特性を理解するために職員のスキルアップ等を図りながら、幼児期の体験活動の展開と効果についての研究として継続していく。将来的に活動プログラムとして団体への提供又は、市町の事業として継続していくことも視野に入れ、ESD や環境教育の視点も踏まえた活動の展開を図り、関係部局にその効果について伝えていきたい。

海のある地域子どもたちに、地元の海を体験してもらい、その豊かさや課題などについて考えるきっかけづくりとなることを期待している。

② 僕らは勇者だ！わかさわんキッズ冒険隊

II-② 材料と方法

1. 研究テーマと仮説

小学校低学年のテーマは、「特色あるプログラム開発・拡充を進めることで、児童のコミュニケーション能力が醸成されるであろう」という仮説の下で研究を進めた。各年代において、学習指導要領で育成を目指す資質・能力の三つの柱

- ① 学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性」
- ② 生きて働く「知識・技能」
- ③ 未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力」

を念頭に置き、「探求的な興味関心の日常化」「自己実現・自己成長」「課題に向き合う力」の育成を目指し、教育事業を展開し、特色あるプログラムの開発・拡充を進めた。

小学校低学年対象の本事業では、

- ア 自然の中で思い切り遊んだり、生活したりすることを通して他者や海とのコミュニケーションを図ること（探求的な興味関心の日常化）
- イ 海遊びやスノーケリング活動を通して、海の豊かさを体感し、海や生き物に興味・関心をもってもらうこと（自己実現・自己成長）
- ウ 自然の中での様々なチャレンジを通して、自信をつけてもらうこと（課題に向き合う力）

をテーマに研究を進めた。

また、所内全員で取り組む意識をもち、職員、ボランティア・施設の教育力の向上を目指した。

2. 職員の教育力向上に向けた取組み

- ・事業の目的や目標、プログラムのイメージを共有するために、事業担当者との打ち合わせを複数回実施した。
- ・事業本番までの見通しを立てるため、準備物一覧とスケジュールを立て、それぞれが計画性をもって準備できるようにした。
- ・海の生き物についての知識やスノーケリングの技術を身につけ、深めるために、講師に白井芳弘氏（名古屋 ECO 動物海洋専門学校講師）を招き事業を行った。
- ・担当それぞれにも業務を分担し、責任をもって取

り組んでもらうようにした。

- ・事業本番は、海象状況や準備の進捗、子どもやボランティアの様子など些細なことでも職員同士で共有しながら進めていった。
- ・事前に、講師の先生と事業に対する想いや活動について話し合う場を設けた。



3. 迫る手立て（プログラムデザイン）

白井氏には、スノーケリング活動をはじめ、海遊びや生き物のお話しなどを担当いただき、海と生き物について楽しく学べる機会とした。自分の手で実際に生き物に触れる体験の機会を意図的に設け、興味・関心を高める活動とした。最終日には、グループで成果物（オリジナルの水槽）を作ることで、海との関わりに加え、仲間で話し合っ作り上げる楽しさを味わい、他者や海とのコミュニケーションを図る機会とした。また、海に入ることや飛び込み台から飛び込むことなどの海活動や、身の周りのことは自分で行うなどの生活面でチャレンジする機会を作り、自信をつけさせる場とする。各活動の後には、児童が初めてできたこと、挑戦したことや興味をもったことについて、グループで振り返りを行い、活動を深める機会とした。

児童の生活や活動については、職員に加え、自然の家の高校生・大学生ボランティアスタッフと名古屋 ECO 動物海洋専門学校の生徒がサポートした。自然の家のボランティアは、本年度のボランティア養成セミナー参加者であり、安全への意識や海活動の技術を身に付けているスタッフを起用した。また、名古屋 ECO 動物海洋専門学校の生徒は普段から白井芳弘氏の下で、海活動の技術や知識を学んでいるため、海活動をメインに児童のサポートをした。

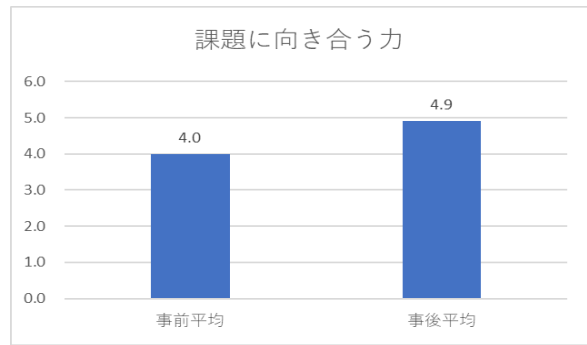
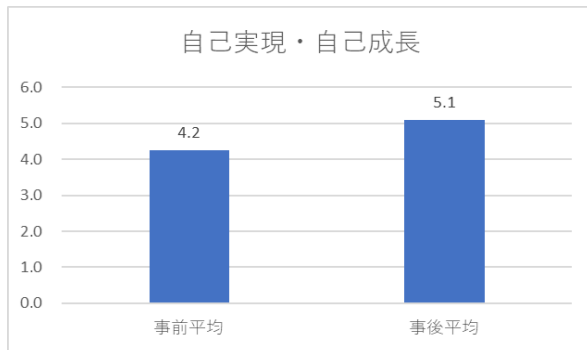
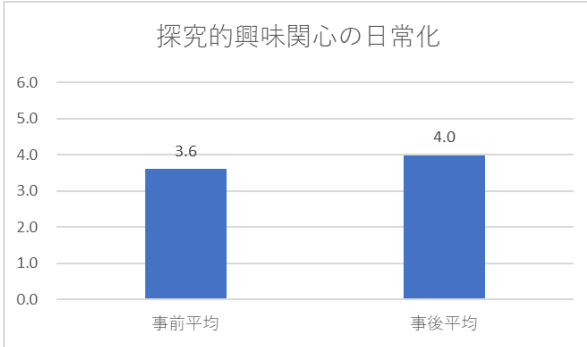
Ⅲ-②結果と考察

1. 結果

ア 参加者アンケート (IKR アンケート)

(1年生6名、2年生6名、3年生8名)

事業の事前事後で参加者20名に各項目の調査を実施した。「探求的な興味関心の日常化」「自己実現・自己成長」「課題に向き合う力」の変化を見てみると、どの項目も事前と比較して事後が高い数値となった。



イ 参加者アンケート (記述式)

探求的な興味関心の日常化

- ・海に入って魚を見ることができた。
- ・スノーケリングで知らない生き物が分かりました。
- ・海遊びやスノーケリングで魚がいっぱい見れた。
- ・魚を捕まえるのが楽しかった。
- ・カートンドッグを作るのを頑張った。
- ・他の人の分のカートンドッグを作ったこと。
- ・友達のゴーグルを拾ってあげたり布団の片付けを手伝ったりした。

自己実現・自己成長

- ・泳いで飛び込み台までいけた。
- ・今まで飛び込んでなかったけど1回飛び込むことができた。
- ・飛び込みができるようになったこと。
- ・ウニがさわれるようになったこと。
- ・ウニは触れなかったけど、触り方を教えてもらい触ることができた。
- ・最初は緊張したけど慣れてきました。
- ・深い所までボランティアのお兄さんに連れて行ってもらった。
- ・一人で寝れてよかった。
- ・海で泳げるようになった。
- ・海に入って魚を見たりジャンプしたりした。

課題に向き合う力

- ・みんなと協力して部屋の掃除ができた。
- ・朝ごはんの火をつけるのを二人で頑張った。
- ・今まで料理したことがなかったが、ご飯を作れた。
- ・みんなで手分けして生き物を見つけた。
- ・みんなで生き物を見つれたり飛び込んだりして楽しかった。
- ・みんなで火をつけたりパンに具材をいれたりした。
- ・みんなで生き物を探して水槽を作ったこと。
- ・いつも全然していない片付けができた。

ウ 職員の教育力向上に向けた取り組みの評価

事業担当者から事業後の評価シートに、「事前にしっかりとコミュニケーションを取っておくこと、何とかなるという安心感を得るためにもポイントを押さえておくことがとても重要だと気付かされた」や「事業担当者同士で細かなことでも確実に共有できることが事業成功への大事な要因であることを改めて感じた」との声があった。また、「海の生き物について知識が増えたので、利用者に分かりやすく積極的に伝えたい」という声もあった。このことから、**2.職員の教育力向上に向けた取り組み**で挙げたことを意識して取り組んだ結果、職員の教育力向上やそのきっかけに繋がったと考える。

2. 考察

【成果】

【探求的興味関心の日常化】

事業を通して一定の効果を上げられた。「海に入って魚を見たこと」などの声が多かったことから、事業の中心である海活動を通して【自然への関心】が高まったと考える。また、事業のテーマである【イ海遊びやスノーケリング活動を通して、海の豊かさを体感し、海や生き物に興味・関心をもってもらおうこと】を意識してプログラムデザインを行った。海遊び→生き物のお話→スノーケリングと段階を踏むことにより、児童の海や生き物に対する興味・関心も段階的に引き上げることができたと考える。生活面では、「みんなで協力して部屋の掃除をしたこと」、「みんなで手分けして生き物を見つけたこと」など、「みんなで～をした」ことを事業で頑張ったことに書いている児童が多かったことから、集団で一つのことに向けて取り組むことで、【思いやり】や【まじめ勤勉】の能力が高まったと言える。

【自己実現・自己成長】

本事業の中で、事業後に数値が大きく高まった能力の一つである。集団行動や、みんなの意見を聞いたり、早寝早起きを含めた基本的な生活習慣を意識したりすることにより、【適応行動】や【日常的行動力】が高まったと考える。また、海活動の準備や野外炊事などを通して、【野外技能・生活】面も向上したと考える。これらの根本には、事業のテーマである【ウ自然の中での様々なチャレンジを通して、自信をつけてもらうこと】を意識したプログラムデザインがあり、この結果、本項目が大きく高まったと考える。

【課題に向き合う力】

本事業の中で、事業後に数値が大きく高まった能力の一つである。【非依存性】や【交友・協調】は、事業の雰囲気作りを担ったアイスブレイク、事業を通して海活動や生活面のチャレンジをできたことなどが能力向上に関係していると考えられる。また、職員やボランティアに対する意見で「優しかった」という意見が大半だったことから、環境的な安全に加え、児童の心の安全も確保でき、本項目の能力が向上したと考える。【自己規制】については、事業のほとんどが集団行動であるということや「みんなで～をした」意見が多かったことから考えると、

一定の向上があったと言える。

【全体】

本事業では、【ウ自然の中での様々なチャレンジを通して、自信をつけてもらうこと】を意識し、具体的に「チャレンジカード」を作成し、児童に配布した。このカードは、難易度がさまざまな複数のチャレンジが記載しており、チャレンジするとシールが貰える。また、各プログラムを振り返るための道具としても非常に有効であった。カードをきっかけに、児童が自分自身の行動を整理できると共に、職員やボランティアから褒められる。他者からの明確な声掛けや振り返りがあったからこそ、3つの資質・能力の向上が見られたと考える。

児童のこのような姿の背景には、職員やボランティアが一つのチームとして、事業の目的を共有・理解し、児童の興味関心や成長を促す声掛けやサポートをしていたことが推察される。また、ボランティア自身も児童の興味関心や成長を促す声掛けを考えながら図ることにより、コミュニケーション能力の向上につながったと考える。そして、児童の記述アンケートにボランティアに対する好意的な意見・評価を得ていることから、ボランティアの教育力向上に少しでも寄与できたのではないかと考える。

【課題】

本事業は対象が小学校低学年（小学校1～3年生）であり、IKR 調査項目の文を理解するのが困難だったと考える。（内容を理解できるのは小学校4年生以上と想定されている。）この点を解消するため、事前調査では保護者に、事後調査ではボランティアスタッフに読み合わせをお願いし回答してもらった。記入中の児童の様子、「何を聞かれているか分からない」などの声や、保護者への事後アンケートでも「子どもには答えにくい質問が多いように思います。」などの声があり、項目を理解して回答している児童は少なかったと考えられる。

事後の調査で、複数人が1～2の下位評価をつけた項目がいくつか見受けられた。「だれにでも話しかけることができる」、「からだを動かしても、疲れにくい」、「暑さや寒さに、まけない」、「いやなことは、いやとはっきり言える」、「自分で問題点や課題を見つけることができる」である。これらを3つに分類して課題を整理していく。①コミュニケーション（「だれにでも話しかけるこ

とができる」、「いやなことは、いやとはっきり言える」)
②海活動（「からだを動かしても、疲れにくい」、「暑さや寒さに、まけない」）③その他（「自分で問題点や課題を見つけることができる」）①に関しては、本事業は基本的にグループでの活動であり、2日間を通してグループ仲が深まった結果、グループ外の子とは関わる機会が少なかったためと推察する。また、集団心理から自身の思う発言や行動ができなかったことも考えられる。②は、2日間のほとんどを海で過ごしたことが大きな要因だと考える。夏の開催ではあったが、当日は晴天ではなかったことも関係しているであろう。③については、「チャレンジシート」をもとに児童が挑戦をしていたため、「自分で～できる」という主体的意識に繋がらなかったのではないかと考える。

3. 今後の展望

本研究は、学習指導要領で育成を目指す資質・能力の三つの柱を読み替え、ア)自然の中で思い切り遊んだり、生活したりすることを通して**他者や海とのコミュニケーションを図ること**イ)海遊びやスノーケリング活動を通して、海の豊かさを体感し、海や生き物に**興味・関心**をもってもらおうことウ)自然の中での様々な**チャレンジ**を通して、自信をつけてもらうことをテーマに進めた。

考察でも述べたが、参加者の様子や IKR 調査項目の数値から向上が見られ、成果があったことが伺える。また、低学年児童の海活動のニーズがあることが本事業の広報を開始した段階から分かった。これらから、低学年児童向けのスノーケリングや海遊びなどを、早急に研修支援プログラムに落とし込んでいくべきと言える。しかし、昨年もあったが、今回の海活動は、大人の人数や専門性の高いボランティアスタッフを多く起用したことで展開できた。これを機に他の研修支援プログラム（シーカヤック、ボート活動）の安全管理の点も再考し、参加者と指導する職員の人数や体制を見直す必要があると考える。

課題でも挙げたように、調査項目への回答が環境に影響されたと考えられるケースがあった。このことから、事業に関わってもらった職員・スタッフには児童一人一人をよく観察し、よく話してもらいなどの事前周知をし、各活動後に振り返りを行うように伝えても良いのではないかと考える。そのためには、振り返りの具体的な声掛けなどの知識・技術も習得する場が必要と考える。

来年度は以上の課題を解決するために当事業を若狭湾の「特色あるプログラム開発・拡充」の主に位置付け、低学年期のスノーケリング・海遊びのプログラム開発を目指しながら、「海の環境教育」の視点を取り入れた教育事業として展開をしていきたい。その中で児童がどのように変容していくかを適切な効果測定を行いながら研究を展開していきたい。



③ 若狭湾海冒険 ～海とつながろう～

II-③. 材料と方法

1. 研究のテーマと仮説

小学校高学年から中学生期のテーマは「特色あるプログラム開発・拡充を進めることで、子どものコミュニケーション能力、自ら科学する心が醸成されると同時に、自然の家の教育力が向上するだろう」という仮説のもとで研究を進めた。各年代において、学習指導要領で育成を目指す資質・能力の三つの柱

- ① 学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向う力・人間性」
- ② 生きて働く「知識・技能」
- ③ 未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力」

を念頭に置き、小学校高学年から中学校期の「豊かな感受性」に対し自然体験活動を通して、「コミュニケーション能力・自ら科学する心」の場面がみられるよう、教育事業を展開し、特色あるプログラムの開発・拡充を進めた。

小学校高学年から中学校段階の本事業では、

- ア 若狭湾の自然の中で生活することを通して、自然の大切さを理解する
- イ 自然の中で、仲間と関わり合いながら生活することで自己の成長を図る
- ウ 生活する中で出てくる様々な課題の解決を通して変化や状況を受け入れる力を付ける

をテーマに研究を進めた。

また、所内全員で取り組む意識を持ち、職員・ボランティアのスキル及び施設の教育力の向上を目指した。

2. 職員の教育力向上に向けた取り組み

本事業を実施するにあたり、目標やプログラム、全体の流れの共通理解を図るために、綿密な打ち合わせを担当者で行った。また、当日までのスケジュールを確認したり、自分の役割を遂行したり、事業を成功させることで、責任感が生まれ、達成感を感じられると考え、役割分担をすることで、担当者それぞれに活躍の場が生まれるよう計画を立てた。さらに、技術面では、大瀬志郎氏（グランストリーム代表）を講師に招き、指導方法や安全に活動するための技術を学び自身の技術・指導方法の向上に繋げられるようにした。

3. 迫る手立て（プログラムデザイン）

- ・シーカヤックやスノーケリングで海中や海の生き物を見たり、感じたりできるよう活動内容を設定した。
- ・ビーチコーミングで海の繋がりや問題について触れる機会を設定した。
- ・海遊びで飛び込み、釣り、生き物に触れ五感で海を楽しむ場を設けた。
- ・野外炊飯、タープ設営等班活動でコミュニケーションを図った。
- ・2日目（夜）3日目（夜）語り場時に自分が感じた事、見つけた事など自分を振り返る時間を設ける
- ・準備や片付け等自分の事は自分できるようにした。
- ・非日常の中でグループ活動を行った。
- ・事業期間は常にバディー及び活動班での行動を意識させることで仲間と関わり合いながら生活しコミュニケーション能力や自身の成長を促す場とした。

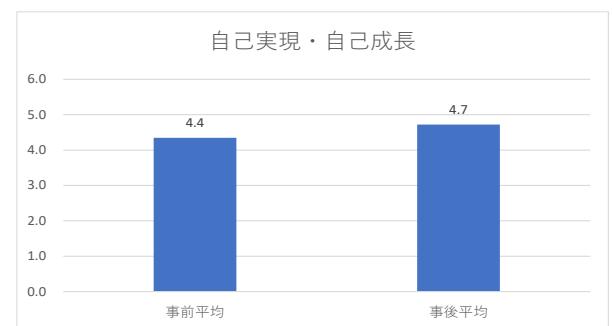
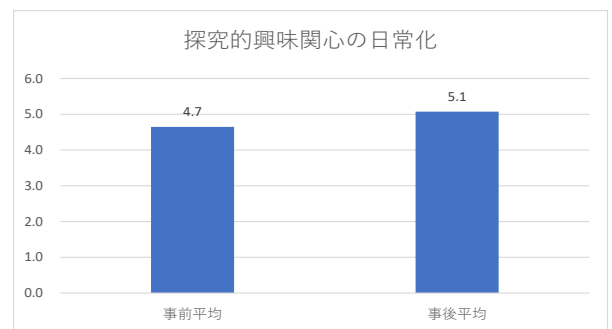
III-③. 結果と考察

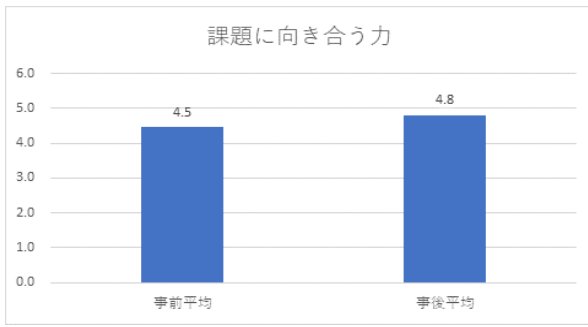
1. 結果

ア 参加者アンケート（IKR アンケート）

（5年生3名、6年生3名、1年生3名、2年生1名）

事業の事前事後で参加者20名に以下の各項目の調査を実施した。「探求的な興味関心の日常化」「自己実現・自己成長」「課題に向き合う力」の変化を見てみると、どの項目も事前と比較して事後が高い数値となった。





イ 参加者アンケート（記述式）

探求的な興味関心の日常化

- ・シーカヤックに乗って海に出たり、みんなで海で泳いだりしてすごく楽しかった。
- ・魚が1匹しか釣れなかったのが悔しいのでまたチャレンジしたい。
- ・自然に対して、すごく不便だと思っていたけど、参加してみて自然の中で過ごすことがすごく楽しかった。
- ・文明から離れて過ごすのは嫌だったけど、やってみるとすごく楽しかった。
- ・魚釣りで僕にも魚が釣れてすごく楽しかったし、達成感があった。また釣りたい。
- ・自然の中で、海に潜ったり、岩から飛んだりして、何もなくても楽しく過ごせることがわかったから、また自然の中で遊びたい。

自己実現・自己成長

- ・今までご飯は作ってもらっていたけど、自分でもやれることがわかったので、たまには自分で作ってみたい。
- ・自分の意見を中々言えなかったけど、海冒険では班の仲間とたくさん意見を言い合うことができた。
- ・今まで海は怖い場所だと思っていたけど、いろんな世界が広がっていて楽しい場所でもあることを知った。
- ・みんなと協力すれば、役割分担をして、一人では難しいことにも挑戦できるとわかった。
- ・木や葉が濡れていても竹の中は乾いていて火が着きやすいことがわかった。
- ・やったことない高い岩から飛び込みに挑戦し、すごく楽しかったから、これからは初めてのことに挑戦したい。
- ・海で体を動かすことがすごく楽しくて、みんなで

協力することが、自分のためになるとわかった。

- ・友達を作るためには、相手を待つのではなく自分から動くことが大切だとわかった。

課題に向き合う力

- ・初めてのことにたくさん挑戦できたし、挑戦して成功したことばかりだったので、これからはいろんなことに挑戦したい。
- ・流木などその場にあるもので物干しを作ったり、波からテントを守るために穴を掘って濠を作ったりできた。
- ・海の楽しみ方や魚のさばき方を知ったので、家でもやってみたい。
- ・海は汚れていっているからきれいにしないと大変なことになるから、これからは自然を守っていきたい。

ウ 職員の教育力向上の取り組みの評価

責任をもって役割に取り組むことができたことで、事業担当者としての意識が高まった。不安なく事業当日を迎えることができ、参加者の子どもたちに自信をもって接することができた。講師の専門的な技術や魅力ある生き方を目の当たりにしたことで、職員の自然体験指導者としてのあり方や、立ち振る舞いを学べた。



2. 考察

【成果】

探求的な興味関心の日常化

参加者アンケートでは、事業を通して0.4ポイント上昇した。日常から離れ、大自然と向き合うことで、様々な事象に対して関心をもったのではないかと考える。また、初めて出会った仲間とともに生活したことも一人一人の変化に少なからず影響を与えていると考える。自然の中では、何もないことへ

の不便さを感じつつも、仲間とともにテント設営をしたり、炊事をしたりしたことで、どうすれば楽しく過ごせるか工夫を凝らす姿があった。普段の生活では体験できないことへ挑戦し、楽しさを見出すことができたことで、様々なことに興味をもち、挑戦する姿が生まれたのではないかと考える。

保護者アンケートでは、「自分の事は自分できるようになった」「家事を自主的に手伝うようになった」「どのような事をしたのかよく話すようになった」「食べられなかった魚が食べられるようになった」等の意見があり、事業中だけでなく、日常生活においてもここでの経験が生きてきていると考える。

自己実現・自己成長

参加者アンケートでは、事業を通して0.3ポイント上昇した。火おこしを通して、着火しやすいものを知り、自然に対するスキルを身に付けたことはもちろん、事業に参加し、新たなチャレンジをしたことで、「自分にもできる」といった感覚を認知したり、新たな発見につながったりしたのではないかと考える。これまで自分の意見を発信することが苦手であった子も、グループで楽しく、また協力して生活しなければならないこともあり、自分の意見を伝えられるようになった。このように子どもたちの内面の成長にもつながっていると考える。さらに、「やったことない高い岩から飛び込みに挑戦し、すごく楽しかったから、これからも初めてのことに挑戦したい」というアンケート多くのチャレンジが成功したことで、次への挑戦、未知への挑戦をする意欲の向上にもつながったと考える。

課題に向き合う力

参加者アンケートでは、事業を通して0.3ポイント上昇した。子どもたちは、無人浜での野外泊を通して、常に何かしらの課題と向き合いながら生活をしたことで、常に思考しながら活動していたのではないかと考える。「濡れた衣服を乾かしたい」「打ち寄せる波からテントを守りたい」など快適に生活するために思考を繰り返す姿が多く見られ、それぞれの発達段階に応じたアイデアを年長者が生かしてさらに考えを深めることにつながったのではない

かと考える。

【課題】

本事業の参加者は小学5年生から中学2年生であったが、年齢の異なる者同士がグループになり活動をしたことで中学生が小学生を見守ってくれたり、指示をしてくれたりする場面があった。その反面、グループで意見を出し合っている時には中学生の意見が押し通される場面もあった。これでは、小学生が自分の意見を伝えにくい状況が生まれてしまうと感じた。次年度以降、グループ編成をする際にはねらいを明確にして編成する必要がある。

事業実施期間中に天候の悪化が予想され、随時予報を確認しながら実施をした。事業3日目午後から激しい雷雨となり、判断に屋外での活動であるため、テント泊を実施するのかどうかの一定の実施判断基準が必要であると考える。その中で、活動内容等を検討することが望ましい。

3. 今後の展望

小学校高学年から中学校段階のテーマを「コミュニケーション能力」「自ら科学する心」とし、「特色あるプログラム開発・拡充を進めることで、子どものコミュニケーション能力、自ら科学する心が醸成されると同時に、自然の家の教育力が向上するだろう」という仮説のもと、本研究を行った。IKRアンケートの結果からも、成果があったことが伺える。よって実践研究事業としては今年度で一旦の区切りとする。

また、講師の大瀬氏の海に対する考え方、生き方を目の当たりにすることで、環境教育の視点を多く学ぶことができた。来年度はその得られた知識、技能を若狭湾の既存するプログラム（スノーケリング、シーカヤック、カッター、ビーチコーミング）に活かしていく。

さらには、若狭湾のフィールドを最大限に活かせる教育事業として、様々な可能性を模索できる事業として展開していきたい。

④ 高校生顕彰制度地域探究プログラムオリエンテーション合宿 in 若狭

II-④ 材料と方法

1. 研究のテーマと仮説

高校生のテーマは、「特色あるプログラム開発・拡充を進めることで、生徒の自ら科学する力が醸成されるであろう」という仮説の下で研究を進めた。

各年代において、学習指導要領で育成を目指す資質・能力の三つの柱

- ① 学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性」
- ② 生きて働く「知識・技能」
- ③ 未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力」

を念頭に置き、「探求的な興味関心の日常化」「自己実現・自己成長」「課題に向き合う力の育成」を目指し、教育事業を展開し、特色あるプログラムの開発・拡充を進める。

高校生対象の本事業では、

- ア 地域の産業に関心を持ち、そこで働いている人々とコミュニケーションを図ること
- イ 地域の特徴や実態を把握し、地域がよりよくなるための知識、能力を身につけること
- ウ 課題を見つけ問題を多角的に判断し、発信する姿が見られること

をテーマに研究を進めた。

また、所内全員で取り組む意識を持ち、施設の教育力の向上を目指した。

2. 職員の教育力向上に向けた取組み

- ・事前の打ち合わせを密に行い、職員間でプログラム共有することにより、全体の方向性を徹底した。
- ・具体的なファシリテーションの手法についても意見を出し合いながら決定した。
- ・事業中には、各グループ担当の職員同士で、状況を報告し合い、修正に努めた。
- ・地域の学校に職員が訪問し、現在の探究の授業の実態とニーズの把握に努めた。
- ・青少年教育機構のファシリテーション・コーディネーション研修に参加し、知識、技能を深めた。

3. 迫る手立て（プログラムデザイン）

地域実践者からの講話を聴き、地域への関心を高め、より良い地域づくりを実践していく意欲を高める活動を行った。初日は体験活動をしながら、フィールドワーク先の実態を知り、魅力や課題を見つける活動をした。翌日、同じフィールドワーク先に再度出向き、地域の魅力や課題について考えたことたり、疑問に思ったりしたことをインタビューを行い、解決策を探る活動をした。その後、自然の家に戻り、アイデアを仮説として立て、仲間で検証し、まとめる作業を行う。最終日は自らの探究の行動計画を作成し、発信することで今後の見通しを持つ活動とした。

以上のような特色あるプログラム開発・拡充を進めることで、生徒の科学する力が育成されると考える。

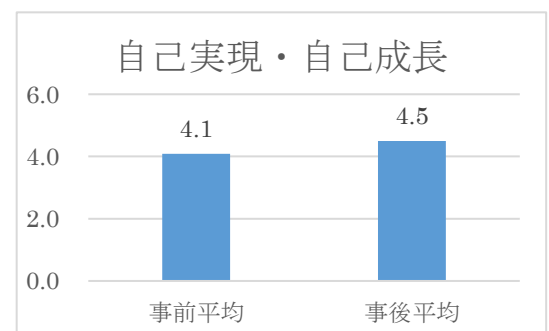
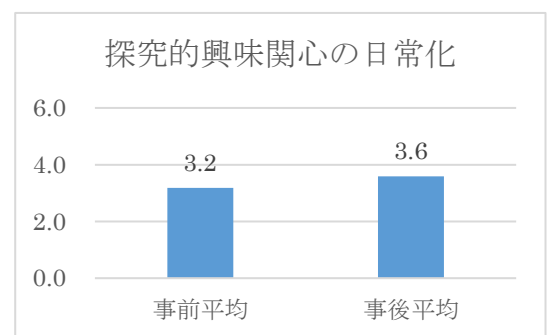
III-④ 結果と考察

1. 結果

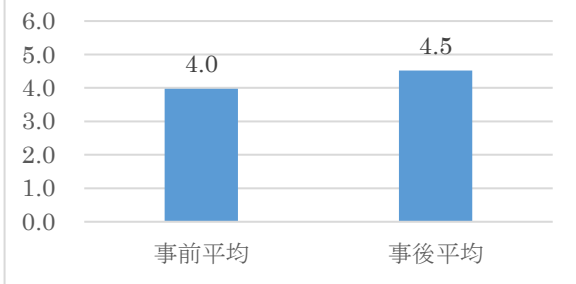
ア 参加者アンケート（IKR アンケート）

（高校1年生12名、2年生4名）

事業の事前事後で16名の参加者に以下の各項目の調査を行った。「探求的な興味関心の日常化」「自己実現・自己成長」「課題に向き合う力」の変化を見てみると、どの項目も事前よりも事後の方が高い数値となった。



課題に向き合う力



イ 参加者アンケート（記述式）

探究的興味関心の日常化

- ・自分の地域の良さをもっと詳しく知りたいと思ったり、地元之恩返ししたい気持ちが強まった。
- ・帰ったら身近で自分でも始められそうなことから始めたい。
- ・課題をもってフィールドワークに取り組み、解決案を考えることがとても楽しかった。
- ・いつも当たり前感じていた小浜にたくさんの魅力があることに気づくことができた。

自己実現・自己成長

- ・何回も発表することで、自分の考えを相手にわかりやすく伝える方法を学べたのでよかった。自分の思考の流れに沿って発表を考えることは自分の考えを再認識し、深めていくことに役立ちました。
- ・フィールドワークに行き行って気づいたことや感じた魅力を周りの人と共有することで、いろいろな考え方や、自分の気づけなかったことに気づくことができ、より深く探究できた。
- ・活動の前には、今からの活動が探究のプロセスの中でどこに位置するのかを確認することができたので、探究の進め方がよく分かったし、やりやすかった。
- ・1日目から順を追って活動を行い、十分な時間がとられていたので、質問、確認、情報収集をしながら、丁寧に自分の考えをまとめることができた。
- ・探究を進めていく中で、さまざまな視点から物事をとらえることが大切だと気付きました。
- ・現代文の文章で見るような問題を肌で感じることで、これからの生活に活かすことのできる体験ができた。

課題に向き合う力

- ・たくさん課題を解決するために、何度も情報収集、整理・分析を繰り返していく中でより良い案を見つ

けることができた。

- ・普段気づけない地域の魅力にどう気づくことができるかが課題だと感じた。
- ・学校の課題研究活動より、自由度が高く、やりやすかった。もう少し、課題解決を現実的に考えるために実践してみたいと感じました。
- ・自分とは何の関係もない地域の課題を聞いて何になるのだろうと考えていたが、地元の人と関わり、距離が近くなっていく中で、いつの間にかその課題を自分事として考えることができていました。さらにそれが自分の地域の課題とつながっていることもあり、とてもいい経験になりました。
- ・自分たちがベストと思った案でも、その地域ならではの課題があり、解決するのは難しいと感じた。

ウ 職員の教育力向上の取り組みの評価

職員一人一人が探究参加者のグループに入ってファシリテートすることで、能力を発揮することができた。当日に至るまでに、職員間やフィールドワーク先との打ち合わせの中で情報を共有できたことが、自信をもってファシリテートできた要因となった。職員が責任感ややりがいをもって自分の任された仕事を利用者のために丁寧かつ緻密に思考、計画する力がついたことで、生徒がスムーズに探究活動に取り組めた。また職員は、講師やフィールドワーク先の人たちと出会い、話をするなかで多くの視点や知識を得ることができた。

以上のことから少しずつ職員の教育力が向上する姿が見られた。

2. 考察

【成果】

探究的興味関心の日常化

数値としては0.4ポイント上昇した。フィールドワーク先が自分の地元ではない生徒が多い中、地域の人から話を聞くことで課題を発見できたり、解決案を考えたりしていく中で、探究への意欲が向上したと考えられる。また学んだことを自分の地元と照らし合わせ、地元之恩返ししたい思いを持ったり、自分にできることは何かを考えたりすることで、探究的興味関心を高め、自分の今後の行動計画を立てるきっかけになった。その大きな要因は地域実践者に現実味のある話を聞いたり、フィールドワーク先に2回出向いたりするこ

とで、地域の人に触れ、その人間性や仕事に対する思いに魅力を感じられたからだと考える。

自己実現・自己成長

数値としては0.4ポイント上昇した。事業の初めに探究のプロセス（課題設定、情報収集、整理分析、まとめ・表現）を共通で示し、活動前にそれが今どこにあたるのかを視覚的に明確にして活動に取り組ませることで、生徒が探究のプロセスを意識して取り組むことができ、その思考を学ぶことができ、自己実現・自己成長につながったと考える。特に整理・分析をする場面ではフィールドワークで情報収集したことをグループワークで意見を出し合うことで、自分にはなかった視点に気づいたり、自分の考えをさらに深めるきっかけになったりと自分の考えをまとめるのに欠かせない活動となった。またそれをまとめ・表現の場面では自分なりにまとめることで、独りよがりの考えではなく、客観的な視点を入れた発表になったのではないかと考える。

課題に向き合う力

数値としては0.5ポイント上昇した。何が課題であるか全くわからない状況から、体験を通して話を聞き、疑問をぶつけることで得た課題を、自分事として捉えることができた。また探究のプロセスを繰り返し回すことで、小さな課題をクリアしながら積み重ねていくことでしか大きな課題を解決することができない、それが探究そのものであることに気づき、改めてフィールドワーク先の人たちに尊敬の念を向けることができた。また学んだことを活かして、最後のまとめ・表現の場面では、自分の地域に帰った時の行動計画を具体的にまとめて発表することができ、課題に向かう力が向上したと考える。

【課題】

参加者は、事業の始めのガイダンス、地域実践者の講演、フィールドワーク、自分の行動計画の発表まで綿密に計画された流れの中で、地域探究プログラム大きなねらいである「探究のプロセス」を学ぶことができた。参加者の多くが地元の生徒ではなかった状況を考えると、事前に自分のフィールドワーク先について調べたり、自分なりの課題を持ったりしておく、初日の訪問時にさらに具体的なイメージをもって参加することができるのではないかと考える。また、発表の際、個人の能力に合わせて、ICT 機器を

使用するなど、発表の方法を選択することができるなど自分の表現したいことが具体化され、内容が伝わりやすくなるのではないかと考える。

「職員の教育力向上」については担当者間の打ち合わせを密にし、方向性を確認しながら進めることができた。さらに教育力を高めていくためには、専門職を含めた職員が、探究プログラムの事業前にファシリテーションの研修を積み、実践していくことが大事であると考え。

3. 今後の展望

地域探究プログラムオリエンテーション合宿の本格実施をしてから2年目を迎えた。参加者も昨年の6名から15名に増加し、充実したオリエンテーション合宿を実施することができた。IKR アンケートの結果からも、成果があったことが伺える。よって実践研究事業としては今年度で一旦の区切りとする。

今後も美方高校の連携クラスを軸に参加人数を確保しながら、フィールドワーク先を開拓し、地域との連携をさらに深めて探究学習の理解を高めることを進めていきたい。また、今年度は青山学院大学から地域学習の依頼を受け、探究で得たノウハウを使って、大学生の学びの場を提供できた。今後、このような要望に対応していく地域とのつながりや、職員のスキルは向上している段階にある。この知識と技能を自然の家職員全体で共有し確かなものにしていく必要がある。それらを活用することで、学校の探究学習をサポートするとともに、自然の家でしかできないプログラムを提供していきたい。



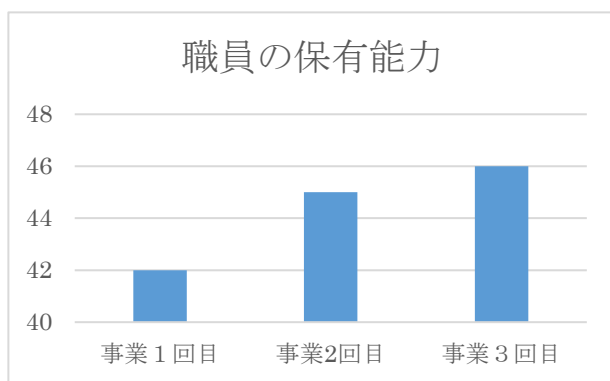
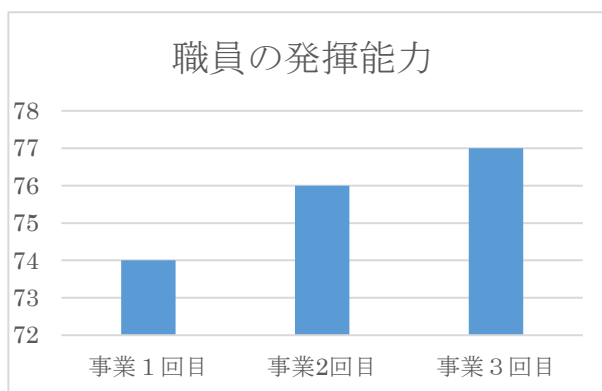
(高校生顕彰制度地域探究プログラムオリエンテーション合宿 in 若狭 活動の様子)

IV 職員の教育力向上評価（事業評価アンケート）

1. 結果と考察

ア 結果

今年度自然の家で開催したすべての事業において事業評価シートを作成し、年間通じて個人の数値評価を行った。



イ 考察

上記のグラフは若狭湾職員の1例である。およそ全体でポイントの高い数値を示した。アンケートを2観点に分けてとったため、観点別で考察をした。

【成果】

職員の発揮能力（施設経営視点）

事業を経過するごとにポイントが上昇した。また 80 ポイントが最大のところ、74～77 ポイントで推移しており、全体を通して高い数値であった。事業の準備段階から自分の意見が言えたり、またその意見が取り入れられたりすることで、自分の能力を高めながら能力が発揮できたのではないかと考える。また打ち合わせの段階から役割分担もし、自分の得意分野を活かした役割を担うことで自信を持って取り組めたこともその要因と考えられる。事業ごとに主担当者を中心に振り返りをし、次の事業に活かすことができるモチベーションも保つことができたことも事業ごとにポイントが上がった大きな要因である。

職員の保有能力（職員の学習視点）

事業を経過するごとにポイントが上昇した。また 50 ポイントが最大のところ、42～46 ポイントで推移しており、全体を通して高い数値であった。「積極的に広報活動ができた」「アイデアをだすことができた」など、事業を経験していくにつれ、最初はわからなかったことでも、知識と技能を得て、より積極的に取り組めるようになったと考える。またモチベーションの向上から「積極的に同僚とのコミュニケーションがとれた」など職員の仕事に取り組む様子がよい循環であったことが伺える。それに伴い職員の保有能力の向上が得られた。

どちらの項目においても、上昇、または高い数値を示しており、職員の研究の柱である「職員の教育力」が少しずつ向上していると言える。

【課題】

個人のアンケート調査を1年間通じて行い分析してきたが、個人の数値にばらつきがあった。自己評価によるアンケートのため、事業を経験するごとに理解が深まり、より厳しく評価する側面もあったと考えられる。事業の特性によってアンケートに答えにくい部分もあり、アンケートの文言、実施の仕方に改善の余地がある。また事業を通して「社会のニーズをとらえられたか」の項目については他の項目に比べると低い数値となった。各事業ごとで特性が異なり、数値にばらつきが出たのは事実であるが、教育事業で完結するのではなく、その目的や最終の形を事前に所内で共有し、職員全体の方向性を示していくことが課題である。

V. 施設評価アンケートの結果と考察

1. 結果 ※別紙参照

2. 考察

「どちらかといえばそう思う」「そう思う」が全体の70%を下回った主な項目を考察した。

【施設に関して】

主な項目は「**施設的环境や設備、その拡充の見直し**」「**自然の家の地域からの理解・認知**」「**働きがい**」についてであった。**環境や設備**を維持することは利用者の満足度につながることから、現状を把握し、持続可能な方法で進めていく必要がある。また、予算削減の観点からこれまでと同様の環境や設備を維持していくことは難しいと考える。検討の上で、継続して維持していくもの

と、老朽化による廃止を含めた方策を考えていくことは必須ではないだろうか。職員ができることとして、現在は全職員が月1回安全点検を行い、修繕が必要な箇所をどのように対応するかを検討しているところである。

また**地域からの理解・認知**については、ホームページ、SNSを効率的に活用することや、出前講座や近隣施設との連携した取り組みをすること、広報の方法を検討することを進めながら、地域に今まで以上に認知され、利用促進につなげることが必要である。職員として所の運営方針や重点項目の理解に努めながら、地域に情報を発信していくツールの強化に取り組んでいく。

働きがいの観点からは、職員の意見を所の運営に十分反映させることで、やりがいをもって業務に取り組めるようになるのではないかと考える。また運営方針の丁寧な説明や、緊急時の対応など施設の現状を鑑みての柔軟な対応が求められている。

【各個人について】

主な項目は「**社会教育への理解**」「**社会的なニーズの掌握**」であった。

社会教育への理解では職員一人一人が社会教育をより理解することは、自信とやりがいをもって業務をするために非常に重要である。年度の当所に全体での説明を行っているが、伝わりきれていない部分があり、その深め方が個人に任されている部分があるので今後の改善が必要である。同時に自然の家の理念や、存在意義、ナショナルセンターとしての役割についても全体での理解を深められる研修をすすめていきたい。

社会的なニーズの掌握することについても研修支援や教育事業を改善していく際、必ず必要になってくる。日ごろの利用者との関わりや、直接指導、指導者との関わりや、出前授業など外部に出ていく活動の中からニーズをとらえることが重要である。特色化や実践研究などを挙げての取組を活かしながら、利用者のニーズに合った研修支援や教育事業を企画していく。

【参加者・利用者に関わりについて】

おおよそ所としての利用者への関わりは良好なものといえる。主な項目は「**保護者が自然の家の教育活動を理解しているか**」であった。教育事業後のアンケート結果などから、事業参加者の保護者については当該事業の内容をよく理解しているが、その他の自然の家の活動については知らないことも多い。自然の家がどんな目的で

何ができる施設なのかを SNS やホームページを強化して情報を発信していくことでさらなる利用者が獲得できるのではないかと考える。

【地域貢献、地域理解について】

主な項目は「**自然の家の取り組みが地域から期待されたり参考にされたりしているか**」であった。ナショナルセンターとしての立場から持続可能な地域づくりに必要とされる施設を目指し、当施設を知ってもらい、利用してもらうための広報活動はもちろん、積極的に外に出向き、出前授業や体験活動を推進していかなければならない。今年度は小浜市、若狭町の放課後児童クラブに出向き、ニーズに合わせた体験を提供することができた。引き続き、体験活動の良さ、知識、技能を広めていく予定である。

VI. 来年度の活動方針

本研究は2年間継続して4つの教育事業を対象に進めてきた。幼児期の「しぜんはともだち」については、研修支援化、指導者育成が進んできている。「海冒険」に関しては、事業から得た海の環境教育の視点を若狭湾の直接指導(カッター、シーカヤック、スノーケリング)の場において浸透させていくことにより、研修支援プログラムの高度化を図っていきたい。また「探究プログラム」についても、今年度青山学院大学の地域学習をサポートできた実績から、研修支援化に向けての成果をあげられた。また全体を通して昨年度の課題だった職員の教育力向上の評価についても効果測定の方法をそろえたことで、職員の知識や技能が高まっている様子を示すことができた。よって2年間継続してきた本研究は一旦の区切りとする。

来年度は小学校低年齢期の「わかさわんキッズ冒険隊」に焦点を絞り、低学年期のスノーケリング・海遊びの研修支援化に取り組むこと、海の環境教育の視点を取り入れたプログラムを開発すること、事業を体験することによる変化を適切に評価することを目標として「特色あるプログラム開発・拡充」と「実践研究」を合わせて進めていきたい。

謝辞

国立若狭湾青少年自然の家における特色化プログラムは、過去に在籍した若狭湾職員の実践が原型となっている。脈々と受け継がれる体験活動の有効性の調査と評価は、次代の子ども達の体験活動に確実に引き継がれている。びわこ成蹊スポーツ大学の中野氏、名古屋 ECO 海洋動物専門学校 白井氏、やまなみ保育園 元園長の大森氏、グランストリーム代表の大瀬氏には長年に渡り、若狭湾の体験活動に理解をいただくと共に、助言と指針をしていただいている。また、若狭湾の実践は、地域の協力と理解、若狭湾の職員の協力のもとで成り立っている。ここに記して御礼を申し上げる。

付帯資料

(ポンチ絵集)

- ・第4期中期目標・計画における特色化に関する基本的な考え方について
- ・特色あるプログラムの開発・拡充に向けて 構想図
- ・しぜんはともだち (海編)
- ・僕らは勇者だ！若狭湾キッズ探検隊
- ・若狭湾海冒険
- ・高校生顕彰制度地域探究プログラムオリエンテーション合宿 in 若狭

(令和4年度事業報告書集)

- ・しぜんはともだち (海編)
- ・僕らは勇者だ！若狭湾キッズ探検隊
- ・若狭湾海冒険
- ・高校生顕彰制度地域探究プログラムオリエンテーション合宿 in 若狭

(事業評価アンケート、施設評価アンケート)

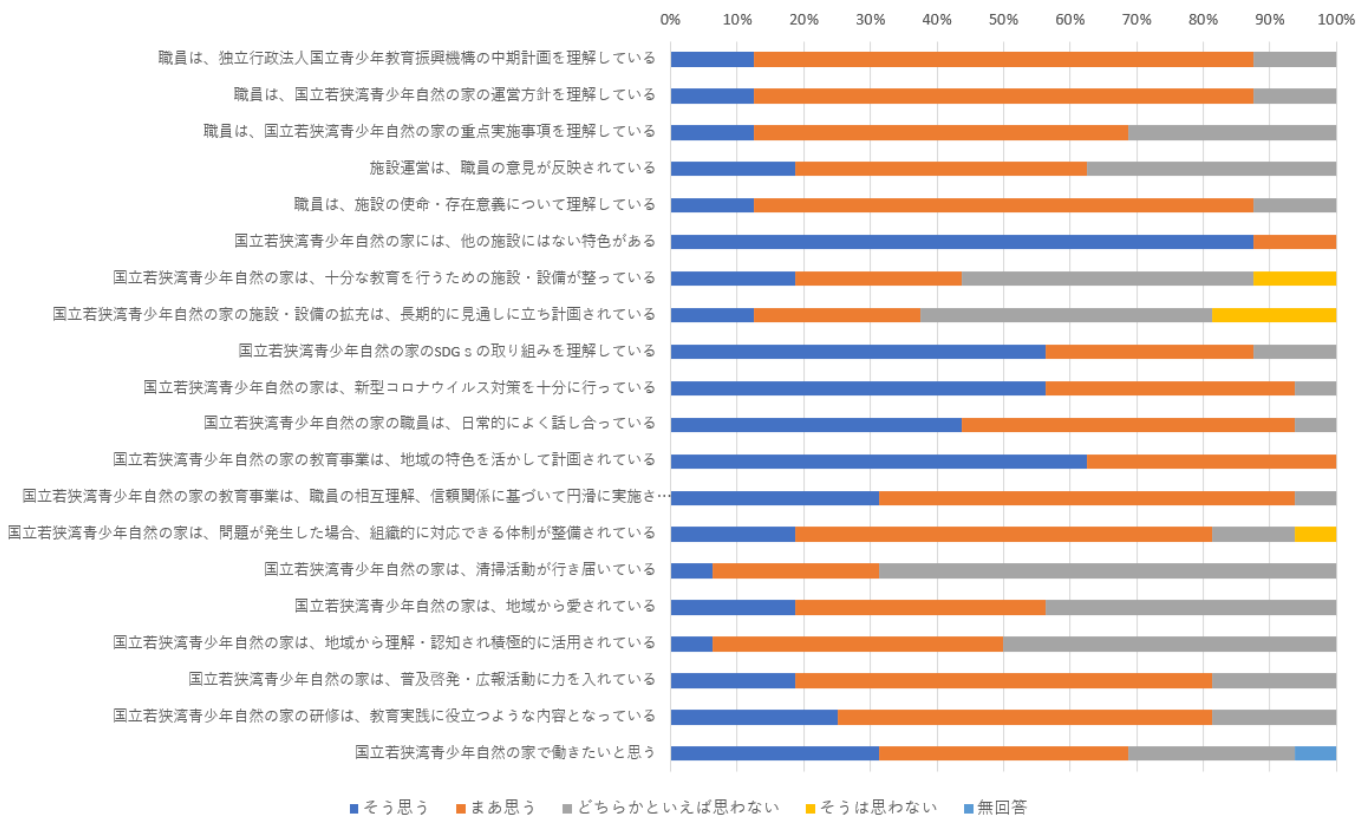
※別紙

V. 施設評価アンケートの結果と考察

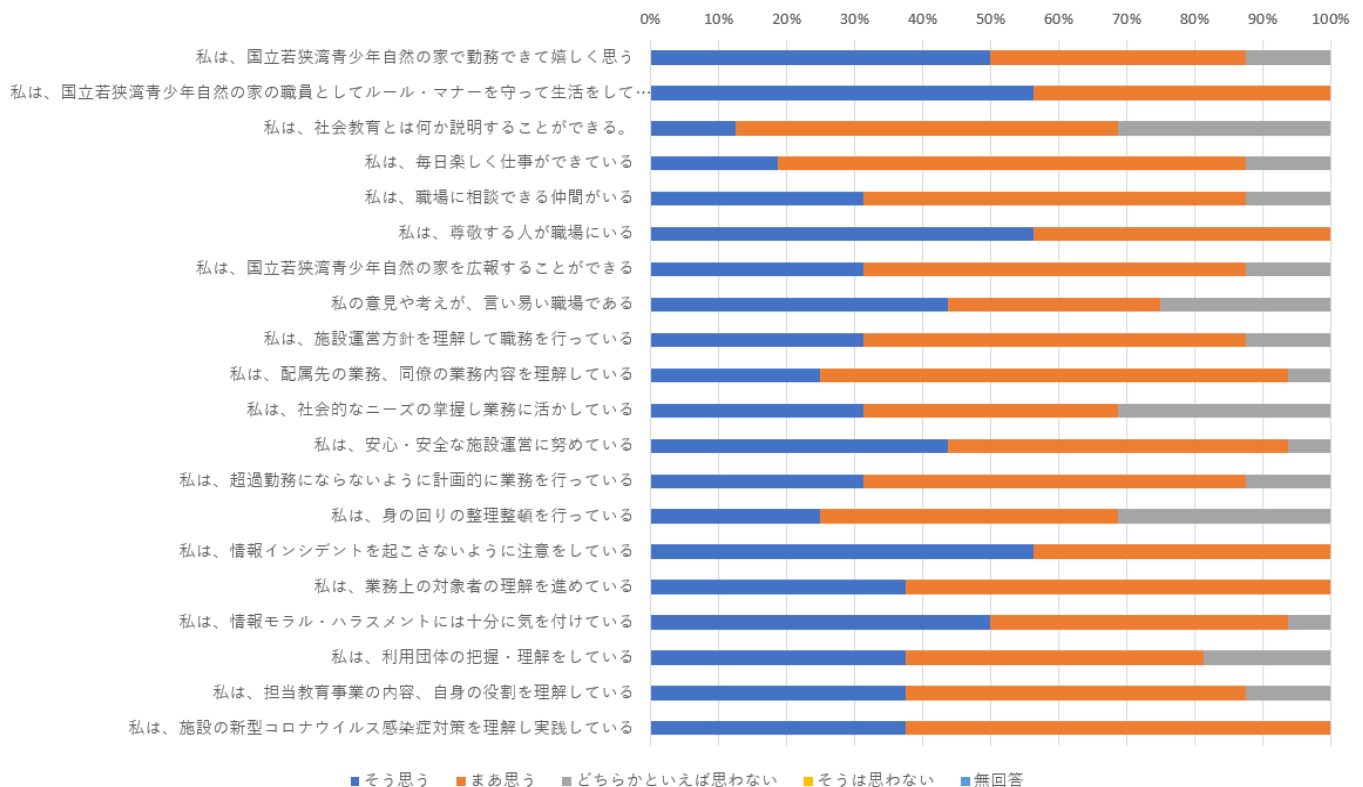
1. 結果

全体的に多くの項目で「そう思う」「まあ思う」が70%を超えている。

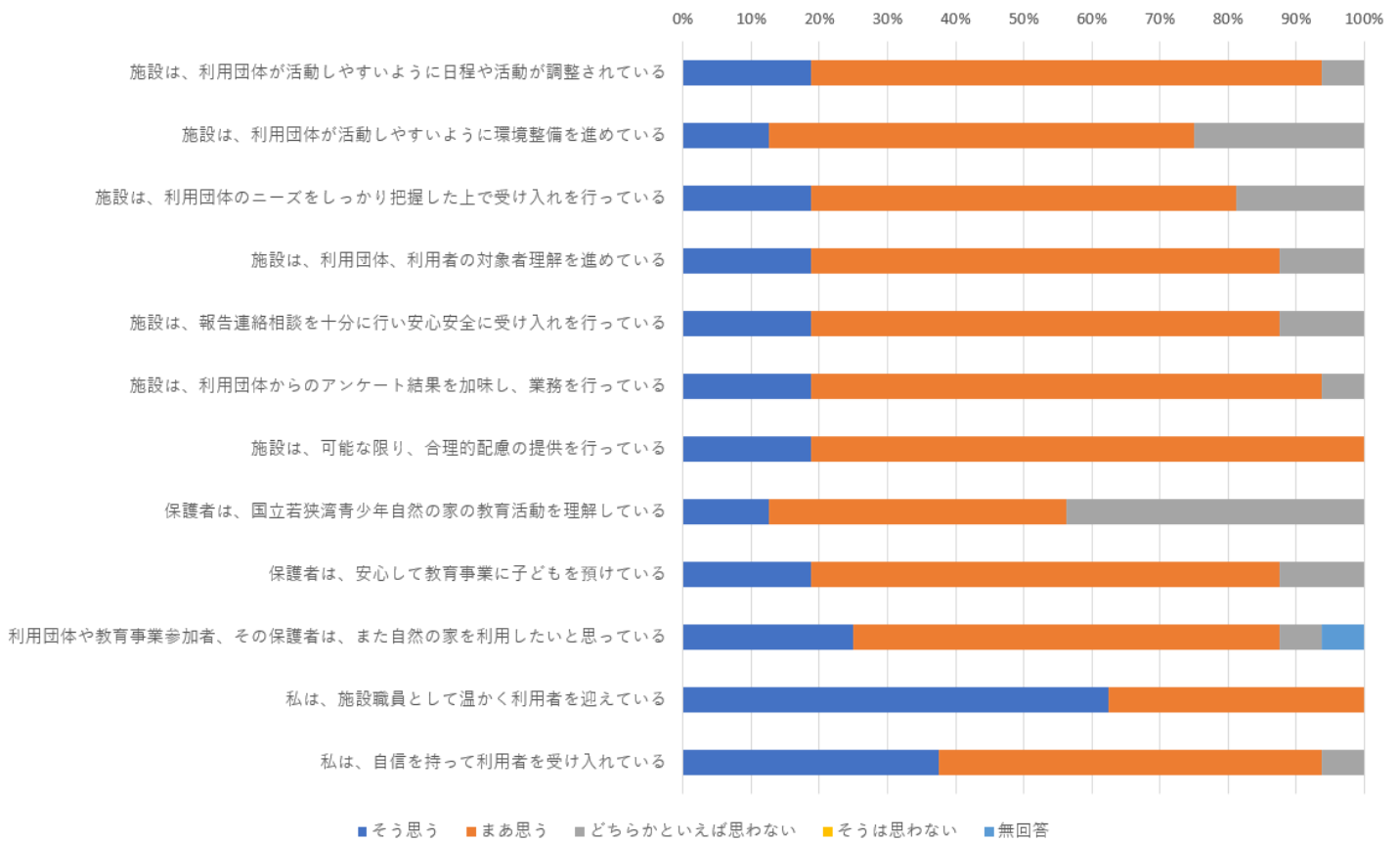
施設についてお聞きします



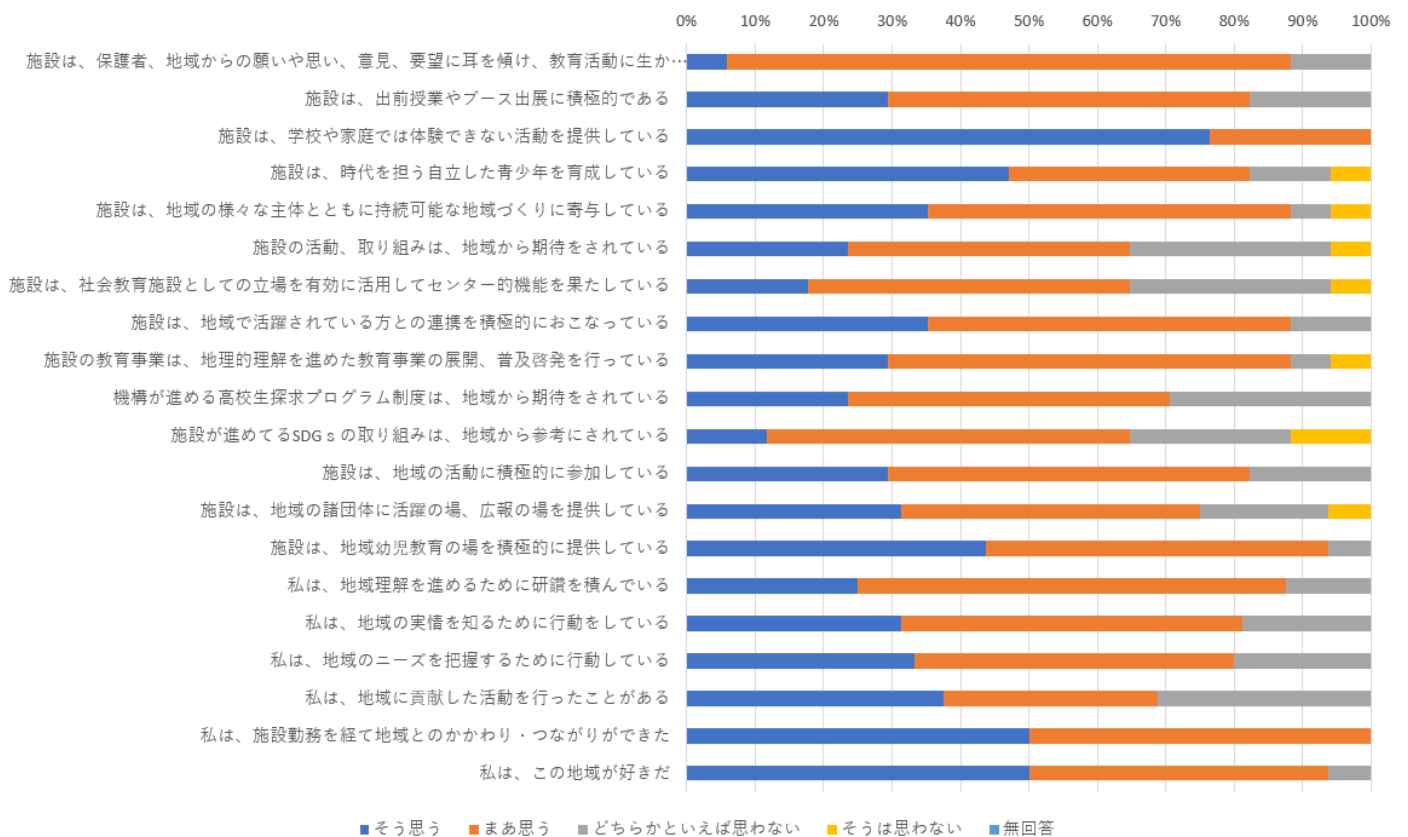
各個人についてお聞きします



参加者、利用者への関りについてお聞きします



地域貢献、地域理解についてお聞きします



(参加者数)

◇しぜんはともだち（海編）

年長園児 387 名（小浜市、若狭町、おおい町、敦賀市）

◇僕らは勇者だ！若狭湾キッズ探検隊

小学1年生～3年生 20名（小学1年生6名 小学2年生6名 小学3年生8名）

◇若狭湾冒険隊

小学5年生～中学2年生 10名（小学5年生3名 小学6年生3名 中学1年生3名 中学2年生1名）

◇高校生顕彰制度地域探究プログラムオリエンテーション合宿 in 若狭

高校1年生～高校3年生（高校1年生5名 高校2年生6名 高校3年生4名 計15名）

特色あるプログラムの開発・拡充と施設の教育力向上に関わる所内の取り組み

—R4年度各年代におけるモデル的实践— 小川 慎司・吉田 哲朗・瀧川 大輔・岡田 泰憲・島田 翔太

要約

施設の研究について紹介する。我々は、若狭湾の環境を生かした教育を考え、その教育を特色化事業と呼ぶ。この研究は、企画指導専門職5名が携わった。本年度は、4つの事業を中心に研究を進めた。幼児を対象とした事業。小学生の低学年を対象とした事業。小学生の高学年、中学生を対象とした事業。高校生を対象とした事業である。本研究のテーマ、仮説を下に、それぞれの事業に課題を設定して研究した。2023年の成果と課題を発表する。

連絡先（R4年度 主任企画指導専門職）

小川 慎司

〒917-0198 福井県小浜市田島区（たがらすく）大浜 国立若狭湾青少年自然の家

TEL 0770-54-3100 FAX 0770-54-3023 Mail wakasawan@niye.go.jp